聖霊降臨後第15主日（特定18）　　2010/9/5

聖ルカによる福音書第14章25節~33節
　於：聖パウロ教会
　司祭　山口千寿

　わたしたちは洗礼を受けてクリスチャンとなり、毎日の信仰生活を送っています。その信仰生活の在り方について、時々、自己吟味をする必要があると思います。自分の信仰の在り方を振り返って、聖書が教えている信仰の姿が、それが自分の歩みとなっているか、確かめることが必要です。そうしないと、いつの間にか自分の考える信仰や自分の抱く信仰のイメージが、聖書の教えに取って代わってしまうということに、なりかねないからです。
　或いは、聖書の教えを、自分に都合の良いところだけをつまみ食いして、よく理解できない考え方や納得のいかないところは無視して、結局は、自分の考えや期待を正当化するために、聖書を利用しているに過ぎないということが起こってくるからです。
　今日の福音書は、新共同訳聖書では「弟子の条件」という小見出しが付いています。イエスさまの弟子であるためには、このようなことが必要なのだ。それがなければ、弟子とは言えない、ということが書かれていることになります。わたしたちがクリスチャンであり、イエスさまの弟子であるならば、今日の福音書に書かれていることは、わたしたちにも欠かすことができない条件のはずです。
　それはどのようなことか。3つの条件が記されています。1つは、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹、つまり肉親や家族ですが、その家族を憎むこと、それだけではなくて、自分の命、自分自身をも憎むこと、それがイエスさまの弟子であることの条件だというのです。2番目は、自分の十字架を担ってイエスさまに従うことです。そして第3の条件は、持ち物、財産を全部捨てるということです。3つとも大変厳しい要求です。これらの要求を文字通り受け取るならば、わたしたちはイエスさまの弟子には、到底なれそうもない、イエスさまについて行くことなど無理だと思うかも知れません。
　大体、家族を憎むなどということになったならば、それは地獄の始まりです。夫婦、親子、兄弟姉妹が互いに愛し合い、助け合って喜びや悲しみを共にしていく中に、家族の絆が強められ、アカの他人は信じられなくても、家族には信頼を寄せて生きていくことが出来るのです。わたしたちは、そのような信頼に根ざして毎日を送っているのです。ですから、イエスさまが、肉親を憎めと仰ったのならば、その真意は、一体何処にあるのでしょうか。
　2つの解釈が行われています。その一つは、「憎む」という言葉は、「より少なく愛する」という意味だというのです（フランシスコ会訳註参照）。家族よりもイエスさまのことを優先することが、ここでは求められているのだと理解するのです。新共同訳聖書の前に出た『共同訳聖書』では、「父、母、妻、子供、兄弟、姉妹、その上自分の命さえもわたしよりたいせつにするなら、わたしの弟子ではありえない」と訳しています。イエスさまを、家族よりも自分よりも大切にすることが、弟子たる者の在

り方だというのです。
「憎む」という言葉のもう一つの解釈は、これは「捨てる」という意味だと受け取るのです。従来の口語訳聖書がそのように訳していました。家族や自分の命を「捨てて」イエスさまに従うのでなければ、弟子になることはできないというのです。「捨てる」という言い方も、大変強い言い方です。
イエスさまご自身は、宣教活動に入られたときに、確かに家族との関係を断って、信仰による共同体が新しい家族であることを宣言されました。「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ」と言って、肉親のつながりよりも、神さまの御心を行うものによる、信仰の家族の形成を強調しています(マルコ 3:34~35)。
しかし、そのイエスさまも、母マリアのことを心配し思いやることを決して忘れたわけではありません。十字架の上から、愛する弟子に母マリアを託して世話することを委ねておられます。信仰の交わりの中に母マリアを預けたのです(ヨハネ 19:26~27)。イエスさまは神さまの御心に従って、その務めを果たすことを第一のこととされましたが、だからといって、家族のことをどうでもいいことだといって顧みなかったのではありません。
話は変わりますが、みなさんの中には、教会で結婚式(聖婚式)を上げられた方が、少なくないと思います。誓約の言葉を言うときに、日本では新郎が先に言いますが、そのとき新婦の右手をとって言います。新婦が誓約をするときも新郎の右手をとって言います。覚えておられるでしょうか。しかし、右手をとるという動作を、新郎新婦が自分でするのではありません。その間に司祭が介入するのです。新婦の手は司祭から新郎に渡されます。新郎の手も司祭から新婦に渡されます。何故、このようなことをするのでしょうか。
恋愛であれ、見合いであれ、結婚することを決めたのはご当人同士です。2人が同意して決めたことですから、自分たちで互いに手を取り合って、誓約すればそれで充分なように思われます。しかし、自分で選んで結婚を決めたその相手は、神さまによって選ばれ、定められ、生涯を共に歩んでいくために授けられた相手であることを明らかに示すために、教会は2人の間に司祭が入って手を渡すのです。自分の感情や気持ち、相手への思い、そういったものを、全部神さまにお捧げして、改めて神さまが授けて下さる相手として、相手を受け直すのです。ですから結婚生活においては、神さまから授かった相手を生かすことに心を砕くのです。そうすることで、自分も相手によって生かされるような夫婦となることが出来るのです。このことは、「命の恵みを共に受け継ぐ者として」(Ⅰペテロ 3:7)相手を尊ぶことによって、初めて可能とされるのです。
家族というのは、血が繋がっているから、そこに寄りかかって頼りにし、当てにできる関係であるとするならば、そのような関係を、一端断ち切ることをイエスさまは求めておられるのです。自然の関係の中で完結してすますような家族関係は、それこそ「憎み、捨てられ」なければなりません。信仰というのは自然の延長線上に成り立つのではありません。神さまのお恵みなのです。神さまのお恵みの中で、家族関係も新たに造り替えられることが求められているのです。それがイエスさまの弟子としての家族の生き方です。

次に、自分自身を憎むことについてはどうでしょうか。自分の命をより少なく愛する、捨てるということは、自分の思いを優先させることではなくて、神さまが必要とされるときには、いつでも自分を差し出すことができる、その用意ができているということです。悲壮な思いからするのではありません。神さまのご用のために用いていただけることを喜びとするのです。自分が自分の主であるのではなくて、イエスさまこそが、わたしの主であるという信仰に立つのです。これは言い換えれば、自分の十字架を背負っていくということであると思います。自分の願いや思いが実現することを望むのではなくて、それらを十字架につけて、み心に従うことを最優先するような生き方が、イエスさまの弟子には求められているのです。

3番目の財産を一切捨てるということも、結局は同じことが求められているのだと思います。実際に、このみ言葉通りに生きてきた、そして今も生きているクリスチャンは少なくありません。テゼのコミュニティを始めたブラザー・ロジェという方は、その修道会の在り方について次のように書いています。「テゼ・コミュニティーは、贈り物や献金を一切受け取らず、ブラザーがその家族から受け継ぐ遺産についても受け取ることをしない。その生活費は自らの労働によって生み出し、それらをすべて分かち合っている」(『祈り・信頼への源へ』)。そのようにして、イエスさまの弟子であることを生きようとしているのです。

これは、特別に選ばれた人だけに求められていることではありません。イエスさまがこの話をなさったのは、一緒についてきた大勢の群衆を相手に話されたのです。12弟子だけに語られたのではありません。これは、わたしたちに対するイエスさまの要求です。財産に対する執着を捨てることを求められたのです。財産のことなどは、どうでも良いというのではありません。財産がある人は、それが多かろうが少なかろうが、しっかりと管理し、生かして用いることに心を配らなければなりません。しかし、そのことに捕らわれて、心を奪われて執着し、寝ても醒めてもそのことばかり思い続けるようになっては、弟子である条件に相応しいとは言うことができません。

わたしたちの心の中心を占めているものは何か、とイエスさまはお尋ねになるのです。その問いかけに、わたしたちはどのようにお答えすることができるのでしょうか。イエスさまの弟子としての答を出せるように、一人一人が自分の信仰を振り返り、その歩みが深められるように祈りましょう。